



第5回模擬授業フェスティバルを開催

第5回模擬授業フェスティバルを2月20日(木)に3号館255教室で開催しました。

第一位のグループは、数学教育研究室I、第二位のグループは、国研(中の下の)、第三位のグループは、未来のセンセイ、でした。すべてのグループが大変意欲的で、素晴らしい発表でした。

第一位から第三位までのグループの方に感想を書いてもらいました。学年次は昨年度のものでした。

模擬授業フェスティバルに参加した感想

【第1位】数学教育研究室I

理数教育コース数学専攻3年次 佐々木隆紀

今回の模擬授業フェスティバル参加の目的は、「 $\frac{1}{6}$ とは6回に1回起こることを意味する」という誤概念を身につけさせない授業づくり及び自身の授業力向上である。そのためサイコロを用いた授業が主流の「不確定な事象の起こりやすさ」において、おみくじを用いた授業を行い、おみくじの中身を確認する活動を行うことで誤概念の形成を抑止したり、より簡潔かつ効果的な発問を考察し、授業内で実践したりした。これらの工夫の結果、フェスティバルでは最優秀賞をいただくことができ、とても光栄に思う。

しかし、評価シートや先生方の講評から、さらに工夫できることがたくさんあることを知った。特に、ICTを活用してグラフを作る際に、生徒の『いつまでやるの、もういいんじゃない。』といった言葉を拾い、『じゃあどのくらいまでで十分だと思ったの。』という問い返しができればよかったというご指摘は非常に参考になった。このことから、授業を自分の頭の中に留めず、授業実践をたくさんの人に見てもらい、意見してもらうことがさらなる授業改善・授業力向上に繋がると身をもって知ることができた。今後も自分の現状に満足することなく、他者の協力を得て、自身の力を高め続けたい。

また、様々な教科・校種の模擬授業を見られたことも大きな収穫だったと感じている。中学校・高校では教科担任制であるため、他の教科でどのような授業の進め方をしているのか把握する機会が少ない。そしてどの校種についても、他校種の授業を見る機会が少ない。そのため、今回のような他教科・他校種の授業を参考にして自分の授業を省みる機会は貴重であったと考える。省みたことを今後の授業実践に活かすとともに、教員になってからも他教科・他校種の授業を見る機会を積極的に設けたいと感じた。

以上のような本フェスティバルでの学びを活かして、まずは教員採用試験に向けて、将来の教員生活を見据えながら精進していきたい。

最後に、本フェスティバルを開催してくれた皆様、模擬授業を共に練り上げたチームメイトの皆さん、そして私の授業を見てくださった全ての方々に感謝申し上げます。

【第2位】国研(中の下の)

教育実践コース国語専攻3年次 神馬卓也

模擬授業フェスティバルを終えた感想としては、「苦しかったけど楽しかった」です。

「楽しかった」というのは、自分の志望する校種、教科、科目、単元で授業をグループメンバーと



作り上げることができたからです。改めて授業を作ることの楽しさを実感しました。そして自分一人だけではなく、志を共にする友人と一緒にあって授業をつくるのがこんなにも楽しかったのだと心から思いました。教員として働いてからも職場の先輩方に頼りながら日々の業務に励んでいきたいです。

「苦しかった」というのは、目指す生徒像に合わせた活動を考えることに苦労したからです。「本文を根拠として個々の作品の解釈(何を待つのか)を確立する」ことが目指す生徒像でした。「個々の」とあるようにある程度、作品の解釈は多様であることを許容していました。むしろその多様性を根幹として話し合いを進めて深い読みを実現しようと考えていました。この「解釈の多様性」を実現するために大変苦しみました。授業は到達してほしい読みに向かって指導者が支援を行います。授業をするというだけで生徒の読みは完全な自由ではなくなってしまう。けれど同時に完全に自由な読みをさせると授業の意味が失われる。ただ時間をとって生徒に『待つ』を読ませれば多様な解釈は生まれるかもしれないが、それでは学びとはならない。この「解釈の多様性」と「学び(到達してほしい読み)」の落としどころをどこにするか、そしてこの二つを両立するための活動について大変悩みました。

学習指導要領にも記載されている「解釈の多様性」を実現することが今回最もやりたかったことでした。そのためには先ほどの大きな壁が存在し、乗り越えるにはとても苦しかったです。(乗り越えたかどうかは怪しいですが…)しかし同時にその壁をグループメンバーや友人、先輩方、後輩と共に考えることで乗り越えようとし、自分のやりたい子ができたという喜び、楽しさを味わうことができました。授業をつくることの苦しさで楽しさを改めて実感しました。大変貴重な経験となりました。

最期にこのような機会を設けてくれた小池先生や、評価をくださった先生方、そして運営を務めてくださった院生の方々をはじめとした皆様、本当にありがとうございました。

【第3位】未来のセンセイ

教育実践コース2年次 日諸怜奈

初めて模擬授業フェスティバルの存在を知ったのは一年前の冬でした。既に募集締め切りの過ぎたポスターを見つけて、「こんなこともやっているんだなあ」と半ば他人事のように思うと同時に、「来年は自分も」という気持ちが少しだけ浮かんできたのを覚えています。

時は過ぎ二年次の附属実習を終えた秋。その頃

私は実習で目にした子どもの実態に対して授業というかたちで、それも道徳の授業で解決策を提示できないかと考えていました。

そして一年越しに見つけた模擬授業フェスティバル出場者募集のポスター。締め切りはまだ先。出場を迷わず決めました。

そんな思い入れのある模擬授業フェスティバルについて、今回授業をつくっていくにあたって悩んだこと、成果、また今後に向けた取り組みについて話していきたいと思います。

はじめに悩んだことですが、扱う教科を道徳にしたということが一番に挙げられます。国語科教育が専門で、かつ二年次だった私たちは大学の授業でもまだ扱っておらず、まずは道徳の授業の基本的な進め方や指導案の作り方から資料や書籍で調べる必要がありました。また今回提示した授業は学んでほしい道徳的価値として「友情・信頼」をおいていましたが、話し合ううちに学んでほしいのは「男女理解」なのか「人間理解」なのか、はたまた「思いやり」なのか自分たちの中でも軸がぶれてしまい、最初に出来上がった指導案は教材観・児童観・指導観になんとも一貫性のないものでした。そこで、道徳という教科への知識や考えの不足を痛感しました。

しかしその分得られたことは多く、「実習で目にした子どもの実態の解決」という目的のもと道徳という教科の授業実践に挑戦したからこそ、理論をふまえて実践する、そして実習などの実践からもう一度理論に立ち返り、再び実践する…という「理論と実践の往還」の重要性に気づけたと考えています。

次に成果として挙げられるのは、一緒に出場した仲間と何度も話し合っただけの授業のかたちにできたということです。ときには考えが衝突したり、話し合いが深まりすぎて気づけば日づけが変わっていたりということもありましたが、中途半端にせず最後まで教材分析を共にしてくれた仲間、また何度もアドバイスをくださった研究室の先輩方には感謝の思いでいっぱいです。国語科の授業はグループで教材分析をすることが多いのですが、その協働して分析するよさを改めて感じました。

さて、三年次に進級するといよいよ公立小学校での実習が待っています。専門教科の授業以外にも担当する教科は増え、その中には道徳もあります。今回の経験をこの実習に活かすとともに、模擬授業フェスティバルを通して再認識できた深い教材分析の大切さや理論と実践を通した授業づくりという考え方をもち今後大学での学びに励んでいきたいです。

第5回 模擬授業フェスティバル プログラム

場所:3-255

1. 開会行事 (14:00~14:10)

- ①開会の辞
②開会のあいさつ 佐藤 学 附属教職高度化センター長



2. 模擬授業演示 (14:10~16:25)

	時間(15分)	グループ名
①	14:10~14:25	社会科教育研究室
②	14:25~14:40	数学科ソリタリー
③	14:40~14:55	カルメ焼き
④	14:55~15:10	音楽科教育研究室
《休憩 15分》		
⑤	15:25~15:40	佐藤 美晴
⑥	15:40~15:55	数学教育研究室 I
⑦	15:55~16:10	未来のセンセイ
⑧	16:10~16:25	国研(中の下の)

3. 講評 (16:25~16:40)

- ①佐々木 和貴 先生、②古内 一樹 先生、③廣嶋 徹 先生、④秋元 卓也 先生

4. 表彰式 (16:40~16:50)

5. 閉会の辞



発表内容一覧

1

①グループ名	社会科教育研究室
②グループメンバー	大堤 光(代表・教育実践3年)、木村純樹(同)、齋藤和也(同)、佐藤拓斗(同)、佐藤望(同)、櫻田智史(同)、宮本晃徳(同)
③中心課題	伝統文化を扱う授業の在り方
④設定理由	社会科において伝統文化について学習する際、伝統文化を残していくためにできることはないか考える活動があるのだが、その考えられた意見が他人主体になりがちである。少子高齢化が進む中で子どもたちには、子どもたち自身が伝統文化を大切にしたいと主体的に思う姿勢を身につけてほしい。昨年8月に附属小でなまはげを題材に授業を行ったが、意見の中には「人口を増やす」「おじいさんに頑張ってもらう。」などがあり、他人主体の意見が多かった。今回は子どもたち自身が伝統文化を大切にしたいと主体的に思うことができるような形を目指したい。
⑤校種、教科等、学年、単元名	小学校4年生、社会科 単元名「地域の人々と共に生きるなまはげ」

2

①グループ名	数学科ソリタリー
②グループメンバー	三坂 凌(理数教育3年)
③中心課題	二項間漸化式の導出と解答
④設定理由	専門教養の勉強中に難しい分野だと感じ、わかりやすい解法がないかと探していたところ、おもしろい考え方があると発見したので、授業に組み込もうと思った。
⑤校種、教科等、学年、単元名	高校2または3年 教科:数学B 単元:数列

3

①グループ名	カルメ焼き
②グループメンバー	戸田 健太(代表・教育実践3年)、小林瑤(理数教育3年)、佐々木健真(同)、渡邊結子(理数教育2年)、一関尊仁(同)
③中心課題	主体的な学びで素朴概念をいかにして科学概念に変容するか
④設定理由	月の単元は小学校でも学習するが、誤概念としてみについていることが多い。それを生徒の「なぜ?」という疑問から主体的な学習にどのようにつなげて行くかを考えたいから。
⑤校種、教科等、学年、単元名	中学校 理科 3年生 単元:月の満ち欠け

4

①グループ名	音楽科教育研究室
②グループメンバー	外館 実樹(代表:教育実践2年)、佐藤希帆(同)、武井早穂(同)、牧野太一(同)
③中心課題	情景や心情が伝わる歌い方を工夫しよう
④設定理由	生徒が《花》の歌唱を通して、楽譜上の音楽的根拠を感覚し、歌詞の内容と関連させて情景や心情を思い浮かべながら表現の創意工夫ができることを目的とするため。
⑤校種、教科等、学年、単元名	中学校 第2学年 教科:音楽 単元名「情景や心情を思い浮かべながら、表現を工夫して歌おう」

5

①グループ名	佐藤 美晴
②グループメンバー	佐藤 美晴(英語教育3年)
③中心課題	以前から、学習指導要領の「豊かな人間性と感性の育成」の文言が心に残り、教育実習Ⅱ期を通じて、「感性の育成」はどのような形で成しえることができるのか探ることを自らの課題にしていた。自分は小学校教員志望で英語教育専攻ということもあり、日々の模擬授業などでは外国語活動の授業で児童の感性に働きかける授業づくりをテーマにしていたが、CLIL(内容言語統合型学習)という授業スタイルに出会い、自分の専門分野として今回模擬授業フェスティバルでも挑戦してみたいと思い課題設定をした。
④設定理由	
⑤校種、教科等、学年、単元名	小学校 外国語活動 小6 題材「英語で文学作品を感じ取る」

6

①グループ名	数学教育研究室 I
②グループメンバー	金澤 拓海(代表:理数教育4年)、松崎広希(同)、佐々木隆紀(理数教育3年)、福原悠仁(同)
③中心課題	ことからの起こりやすさを数で表す方法を考える。
④設定理由	新学習指導要領において移行措置の内容が示された。その中で以前まで第2学年で扱うことになっていた確率の単元が第1学年に移行することになった。学年に合わせた授業を展開しなければならず、学年が変わることにより既習事項、発達段階が異なるため授業展開も変わってくる。そこで、第1学年に対応した確率の授業展開を行いたいと考えたため。
⑤校種、教科等、学年、単元名	中学校、数学科、第1学年、 確率



7

①グループ名	未来のセンセイ
②グループメンバー	日諸 怜奈(代表:教育実践2年)、松井佑実(同)
③中心課題	男女の意識から生じる、からかったり馬鹿にしたりするような発言をせざるを得ない雰囲気、空間、環境をどうすれば変えられるか?
④設定理由	附属小学校での教育実習(メンバーともに6学年配属)において給食の時間に女子をからかうような話が出て、そこからグループで盛り上がっていた。周りの子どもはそのような発言を「しなければならない」状況であり、言われた女子児童も傷ついていた。このような光景をみたことから、そのような雰囲気、環境の改善策を考えたく中心課題を設定した。
⑤校種、教科等、学年、単元名	小学校 特別の教科 道徳 6学年 言葉のおくりもの



8

①グループ名	国研(中の下の)
②グループメンバー	蛇川涼香(代表:教育実践3年)、古谷優美(同)、神馬卓也(同)
③中心課題	高等学校における文学の授業の在り方
④設定理由	<p>高等学校教育において文学の授業は軽視される傾向にあります。名作と呼ばれる作品を読み、学習したにもかかわらず、何を学んだのかがはっきりしない。何のために文学作品を勉強するのが分からない。このような思いを持つ高校生が多く、これは大きな問題です。</p> <p>平成30年度の学習指導要領改訂により、科目構成が変更され、選択科目として「文学国語」が設立されました。「文学国語」でどんな授業をすべきなのか。先の問題を踏まえながら、新学習指導要領に沿った文学の授業の在り方を考えていきたいと思い、このような中心課題を設定しました。</p>
⑤校種、教科等、学年、単元名	校種 高校、教科 国語、学年 2年生 題材 「山月記」



第三位「未来のセンセイ」の表彰



第二位「国研(中の下の)」の表彰



第一位「数学教育研究室I」の表彰

病気の子どもの教育支援のための研修会に参加して

病気の子どもの教育支援のための研修会が2月19日(水)に秋田県立秋田きらり支援学校で行われた。私は学部専門科目である「病弱児の心理・生理・病理」を履修した関係で参加することにした。

この研修会は、病気の子どもの教育支援について、関係者や市民の理解啓発を図るとともに、本学の学生が多く登録している「病児学習支援ボランティア」として必要な知識・技能を得る機会とすることを目的に、シンポジウムと講演が行われた。

1 シンポジウム「病気の子どもの支援のため、今、教育に求められること」より

シンポジウムは秋田きらり支援学校病弱教育コーディネーター、元小学校病弱・身体虚弱学級担任、病気のお子さんを持つご家族の3名をシンポジストに行われた。シンポジストのお話から、異なる立場からの観点に触れ、自分は今まで病弱や障がいのある子どもたちに関して、学生の立場でしか考えられていなかったことに気付かされた。将来子ども達と深く関わっていくことを自覚し、今回のような多様な立場の方々の考えを基に、子ども達のよりよい支援に努めていけるように日々学んでいきたいと思った。



2 副島賢和氏の講演「涙も笑いも、力になる～子供の喪失を考える～」より

講師は昭和大学大学院保健医療学研究科准教授の副島賢和氏であった。副島氏は、病気の子どもの、本来であれば得られるはずのたくさんの物や経験が失われることにより、自分を責めたり否定的な自己イメージの形成につながってしまったりという喪失から生じるマイナスな影響を基にお話された。病気の子どもの喪失は、病気と共にそれを理由とした他者からの制限により生まれるのだということを実感した。このような子ども達の喪失を取り除くためにも「病気である」という視点ではなく「子どもである」という視点に着目することや、子どもは時に、自分の生命よりも心身の発達を優先するというものの理解、そして子

特別支援教育コース2年次 東海林 天
ども達それぞれの思いをしっかりと汲み取り、尊重して関わっていく姿勢が重要であると感じた。

また、子どもはまだ自分の思いを的確に周りに伝えるのが難しいということに関しても話されていた。それを打開するためには、子ども一人一人の性格や癖等が様々な場面においてどう表れるかについて日常から注目することにより、子どもの思いを理解することが求められるのだと考えた。子ども達の湧き上がる感情一つ一つを大切に受け入れて接していくことも子どもと関わる中で鍵になり、それを実践できるように講義や実習等に励んでいきたい。



3 研修会で学んだことを通して

今回の研修会への参加は、「子どもの気持ちに寄り添うこと」や「思いを理解すること」といった言葉の重みや、その実現は容易ではないということが実感できた。だからこそ、少しずつでも子どもの気持ちを真摯に受け止め、気持ちへの共感が子ども達に確かに伝わるよう、日々学び続けなければならないと感じた。

入学や自宅通養が必要な児童生徒の学習を支援!

参加費無料
相談自由

**病児の教育支援のための研修会
&
令和元年度
第2回 病児学習支援
ボランティア人材バンク研修会**

2/19(水)
13:40~16:40
秋田きらり支援学校 小体育館
秋田県秋田市南ヶ丘1丁目1-1

【対象】
病児の子供の
教育支援に
ご興味がある方

<シンポジスト>

(1) シンポジウム (13:50~15:10)
「涙も笑いも、力になる」
一般学級の子どもたちが教えてくれた大切なこと〜
講師：昭和大学医学部 准教授 副島賢和 氏

(2) 講演 (15:20~16:30)
「涙も笑いも、力になる」
講師：昭和大学医学部 准教授 副島賢和 氏

- 門脇 氏 (秋田県立秋田きらり支援学校 病弱教育コーディネーター)
- 和田芳恵 氏 (元小学校病弱・身体虚弱学級担任)
- 下山美生子 氏 (家族のお立場から)
- <助言者>
- 昭和大学医学部 准教授 副島賢和 氏

【お申し込み・お問い合わせ】
TEL: 秋田大学大学院教職実践専攻 藤井慶博 018-889-2596
FAX: 秋田県立秋田きらり支援学校 進藤忠雄 018-889-8575
E-mail: 秋田大学大学院教職実践専攻 藤井慶博 fujii-yoshihiro@ed.aita-u.ac.jp
主催 病児学習支援ボランティア人材バンク 共催 秋田県立秋田きらり支援学校

2020年3月卒業生・修了生のみなさんへの祝辞（3月24日に全員へ配布）

みなさん、ご卒業、ご修了おめでとうございます。

新型コロナウイルスの感染拡大による異例の状況で卒業式や卒業を祝う会が中止となり、残念至極ではありますが、予想外、想定外のことを完全に避けられるわけではありません。できないことを嘆く、できないことを数えるのではなく、できることを探し、できることに感謝するようにしたいところです。根拠なき楽観主義は悲観主義よりも危険ですが、科学的な楽観主義に立って、みなさんがこれからの人生を切り拓いていかれることを心から信じています。

みなさんには自分自身の人生の主人公であってほしい、希望と勇気を持って自分の人生を自ら創造し、苦しみ、悲しみを乗り越え、新たな道を切り拓いていく主体であってほしいと思います。意識的にせよ、無意識的にせよ、誰かによって支配され、管理される客体であってはなりません。18歳選挙権が実現しましたが、主権者とは選挙権を持つという意味だけでなく、国や社会のあり方を考え、行動し、公権力の誤りを正す主体としての自覚と覚悟を持つことを意味するのではないのでしょうか。

主体的であるためには、自分らしさを大事にして、自分が何をしたいのかを考えてください。自分勝手や勝手気ままというわけではありません。自分のため、という視点と同時に、誰かのため、みんなのため、弱い立場の人のために何ができるかという視点も重要です。自分のためであれば、あきらめるのも簡単ですが、誰かのためであれば、簡単にあきらめるわけにはいかないでしょう。

支配－被支配の関係は、片方の幸せともう片方の不幸せを意味するゼロサムの関係です。人の不幸せを前提とした幸せは決して長続きしません。常に妬まれ、狙われることはもちろん、同じ刺激では満足感が得られなくなる意味でも、本当の幸せとは言えないでしょう。共感的、協働的で対等平等な関係は人の幸せを前提とした幸せであり、Win－Winの関係です。9年前の東日本大震災の時にも感じましたが、幸せは大きさで測れるものではなく、ほんのスプーンいっぱいのおつましやかなもので十分なのです。

また、みなさんには単なる消費者ではなく、生産者、投資者であってほしいと思います。単なる消費とは、後先を考えずに現在の欲求を満たすために資源を使い、枯渇させていくことです。アルコール中毒など、健康を破壊したり、公害のよう

教育文化学部長・教育学研究科長 佐藤 修司
に社会や他者に害悪を及ぼしたりすることもあります。みなさんには、何かを生み出す人、価値を生み出す人であってほしい、生みだされたものが誰かの幸せを作り出す人であってほしいところです。金銭を投資するだけではありません。金銭がなくても、時間や労力・意欲も投資できるでしょう。そして、得られた金銭だけでなく、友人や家族などの人間関係も、さらには自らの心身の健康も大きな資産です。

秋田大学で培った資質能力、人間関係などすべてはみなさんにとっての貴重な財産、資産、資源となり、これからの未来を切り拓くための重要な道具となります。社会に出て、時に大学のこと、学生時代を思い出し、大学を訪ねたり、HPをのぞいたり、旧友と再会してください。今後のみなさんの活躍を心から期待しています。

令和2年3月吉日



教育学研究科↑

教育文化学部↓



3月24日（火）は早朝うっすらと雪が積もるほど寒かったのですが、9時頃からは快晴となり、卒業生・修了生の門出にふさわしい清々しい一日となりました。

感染防止のため、県立武道館での卒業式、秋田ビューホテルでの卒業を祝う会は中止となり、卒業証書等の授与は大学で10時から12時半頃までコース等の単位で行われました。また、マスク着用、手指消毒、座席指定で間隔確保、学生間の会話自粛、コース主任等の簡単な祝辞ののち個々に受領後は退室、臨席教員は少数に限定、在学生等を含めたセレモニーはなしとなりました。女子学生の羽織袴姿は4割くらいだったようです。

ちなみに、国際資源学部と医学部医学科はすべて郵送で、理工学部、医学部保健学科は大学でのコース別など小グループ単位の授与が行われました。

秋田大学教育文化学部同窓会「旭水会」会長 千葉 昭

旅立ちの日に 一同窓の思い

秋田大学の「学位記」を手にした卒業生・修了生の皆様に、心からお祝い申し上げます。

皆さんにとって大学生活の集大成とも言うべき卒業式が、新型コロナウイルス感染拡大の影響から取りやめになり、仲間や家族との喜びや楽しみを分かち合う機会がなくなり、その空虚さは察するに余りあります。

しかし、大学生活での仲間たちとの語らいや思い出、学びを通して得た数々の出来事は生涯の宝として生き続けるでしょう。

秋田大学教育文化学部同窓会「旭水会」は、秋田大学 山本文雄学長、佐藤修司学部長はじめ多数の大学の先生方のご臨席のもと、皆さんの晴れの門出を祝すと共に新入会員歓迎会を準備万端整えてお待ちしておりますが、残念ながらそれも叶いませんでした。

このような時こそ同窓の絆をより深め、共に前を向いて力強く歩んでいきたいものです。

コロナショックは、世界各国に及んでいます。私たちは、グローバル・コミュニティーの一員としての自覚を持ち、多くの出来事を見聞き、グローバルな視野や考えをもって物事に挑戦しなければならないことを再認識させられました。

晴れの門出は、皆さんにとって厳しい門出の一步になりましたが、「旭水会」は皆さんの応援団です。いつでも陰ながら見守り、心の支えになる教育文化学部 学校教育課程・地域文化学科双方の同窓の仲間の会です。H・P等で連携し合い、互いの交流・親睦を深めてまいります。

皆様方の晴れの門出をお祝い致しますと共に、今後のご活躍を心から祈念いたしております。

令和2年3月吉日



↑教育文化学部↓



2020年3月で退職された教員の方々

2020年3月で退職された方々は、以下の通りです。異動の萩原先生以外は65歳の定年による退職となります。例年であれば退職等を祝う会を催しているのですが、今年度は新型コロナウイルスの関係で、3月4日に予定していた会が中止になってしまいました。これまでの多大な貢献に感謝しますとともに、今後のご健勝とご活躍を祈念し、また、学部への変わらぬご支援をお願いいたします。

【杜 威先生】1999年4月～：在職21年間

所属：英語・理数教育講座
担当：理数教育コース
専門：数学教育

【奥山 順子先生】附幼1983年4月～：19.5年間 学部2002年10月～：17.5年間

所属：こども発達・特別支援講座
担当：こども発達コース
専門：幼児教育・保育実践研究

【宮野 素子先生】2010年4月～：10年間

所属：地域社会・心理実践講座
担当：心理実践コース、院・心理教育実践専攻
専門：ユング心理学・臨床心理学
今後：東京の「宮野分析プラクシス」でユング派分析家として活動

【萩原 史朗先生】2015年10月～：4.5年間

所属：地域社会・心理実践講座
担当：地域社会コース
専門：経済学
今後：名古屋学院大学に異動

【古内 一樹先生】2015年4月～：5年間

所属：こども発達・特別支援講座
担当：院・教職実践専攻（教職大学院）
専門：教育実践、教職研究方法論

2020年度主な役職者等の紹介

◎執行部

学部長 佐藤修司
 副学部長（教育・教員養成・財務・施設担当） 武田 篤
 副学部長（研究・地域連携・点検評価・広報担当） 林 良雄
 教職高度化センター長（教職大学院担当） 鎌田 信
 附属学校園代表（附属学校園担当） 藤井慶博
 学部長補佐（地域連携・FD担当） 白木智昭
 学部長補佐（教員養成・附属担当） 小池孝範
 学部長補佐（学生指導・特命担当） 林 正彦
 学部長補佐（国際交流・広報担当） 長谷川章
 事務長 高橋尚之

◎課程・学科・専攻・コース等

学校教育課程主任 遠藤敏明
 教育実践コース主任 吉澤恭子
 英語教育コース主任 佐々木和貴
 理数教育コース主任 岩田吉弘
 特別支援教育コース主任 前原和明
 こども発達コース主任 瀬尾知子
 地域文化学科主任 和泉 浩
 地域社会コース主任 林 武司
 心理実践コース主任 森 和彦
 国際文化コース主任 佐々木千佳
 教職実践専攻長 鎌田 信
 学校マネジメントコース長 原 義彦
 カリキュラム・授業開発コース長 田仲誠祐
 発達教育・特別支援教育コース長 藤井慶博
 心理教育実践専攻長・コース長 中野良樹

◎各種委員会等

学部運営会議長 佐藤修司
 教育企画会議長 武田 篤
 学術研究推進会議長 林 良雄
 FD推進委員長 白木智昭
 入学試験委員長 山名裕子
 教務学生委員長 林 正彦
 学務委員長 佐々木雅子
 キャリア委員長 篠原秀一
 教員養成委員長 武田 篤
 教職入門実施委員長 細川和仁
 教育実地研究実施委員長 石井照久
 教育実習実施委員長 成田雅樹

介護等体験実施委員長
 教職実践科目実施委員長
 保育士養成実施委員長
 地域連携委員長
 地域文化コアカリキュラム委員長
 国際交流委員長
 留学生委員長
 広報委員長
 点検・評価委員長
 学生協議会議長
 学生支援基金運営委員長
 財務委員長
 施設利用計画検討委員長
 安全管理委員長
 情報システム管理委員長
 人事委員長
 人権倫理委員長

◎附属関係

附属幼稚園長
 附属小学校長
 附属中学校長
 附属特別支援学校長
 附属学校運営会議長
 附属学校経営委員長
 附属学校学部共同委員長
 附属学校子どもの人権委員長

◎大学本部（本学部関係）

教育推進主幹
 学長補佐（地域協働・COC+担当）
 地方創生センター副センター長
 学長補佐（男女共同参画担当）
 教員免許状更新講習推進センター長
 同上 副センター長
 ハラスメント相談員

学生相談所専門相談員
 学生相談所相談員

前原和明
 加納隆徳
 未定
 林 良雄
 渡辺英夫
 佐々木雅子
 佐々木雅子
 林 良雄
 林 良雄
 林 正彦
 林 正彦
 武田 篤
 武田 篤
 武田 篤
 佐々木重雄
 佐藤修司
 佐藤修司

宇野 力
 外池 智
 原 義彦
 藤井慶博
 佐藤修司
 藤井慶博
 外池 智
 小池孝範

上田晴彦
 白木智昭
 白井智昭
 山名裕子
 森 和彦
 山名裕子
 堀江さおり
 前原和明
 大西洋一
 小野寺倫子
 柴田 健
 堀江さおり
 前原和明
 小野寺倫子
 大西洋一

ご入学おめでとうございます

地域社会コース4年次 森井基貴(学生代表)

秋田大学教育文化学部への入学、おめでとうございます。学生協議会の一員である私から、皆様の入学を祝福させていただきます。これから始まる皆様の躍動する歩みに、先の世代である私たちは期待しております。

まずは、ここで形式的な話を。

私の所属している「学生協議会」という組織は、教育文化学部に属するコース・学科から集まったメンバーが、教育文化学部全体の活動行事を補佐し、貢献していく所になります。例えば、オープンキャンパスの総合案内であったり、旭水会の主催する行事の補佐であったりと、様々な活動を行っています。

私たちは、学生協議会という形式に拘らず、皆様の大学生活をサポート出来ればと考えています。もし困ったことや、大学に関する相談などがあれば、教3-248にいらしてください。硬い話に限らず、軽い雑談など、皆様との交流を待っています。

さて、ここで少し雑談を。

この記事が出る頃には、私は四年生となっているはずですが、「もう三年も立つのかあ」と、忽然な時間の流れを感じます。かつて、哲学者であるゲオルグ・ヘーゲルは、「ミネルヴァの鳥は迫り来る黄昏に飛び立つ」という言葉を残しています。現実の本質を理解する哲学は、その現実が終わってしまった後に、初めて可能になるという意味が、この言葉には示されています。このことは、哲学に限らず、われわれの生涯を理解することにおいても同義であるように、私は思います。

皆様は、これから始まる四年間を、どのように歩いていくのでしょうか。何か一つ、自分の全てを捧げてでも没頭できるような、そんな何かに出会うことを、私は願っています。それは勉強であったり、部活やサークルであったり、大学外の取り組みであったりするかもしれません。

最後に、私が没頭している勉強の中でも、社会学者であるニクラス・ルーマンの主著から、皆様への激励の言葉として、締めさせていただきます。Have a nice flight!

だから今や、鳥に勇気を与えてやることのできるのだ。

暗闇で嗚咽するのはもう止めて、夜間飛行を始めなさい、と。

Niklas Luhmann: Soziale Systeme

国際文化コース3年次 鈴木進之介(学生副代表)

まずは、ご入学おめでとうございます。近ごろ、話題のほとんどを占めるコロナウイルスなども相まって不安でいっぱいだったことと思います。皆さんはそのような状況の中、努力が報われ、結果に表れたことに自信をもってください。

大学へ進学を志した理由は人それぞれのはずです。学びたいことや入りたいサークル、人によってはなんとなくなどもあるでしょう。そのため、入学する時点でのモチベーションは各々違うと思います。大学進学というものは見方を変えると、時間を得たとも考えられます。先述したように気持ちなどに差異あれど、基本的には4年間で卒業という課程は変わりません。大学は思っている以上に自由な場所であるため、自制心のない人は怠けてしまったり、遊んでばかりしまったりする人も多く見受けられます。まさに、遊ぶも勉強するも自由な時間です。

私から皆さんへのアドバイスとしては、後悔することがないようにということです。遊んでいることもその後の人脈に繋がるなど、決して無駄なこととは考えません。むしろやりたい事を押し殺してまで勉学に励み、そのことがしこりのように残るよりはやったほうが良いと思います。やりたい事ができる環境にあるからこそ、自分で取捨選択をしっかりと欲しいです。交流なども多い場だからこそ、様々な体験をする機会も多いと思います。その中で自分がやりたい事のきっかけは必ず見つかるはずですが。

やりたいことが見つかったら挑戦してみるのが一番です。月並みなようですが、遅いということは絶対にありません。勝手に決めつけて、自分に無理やり言い聞かせるよりは、失敗を覚悟で行動してみてください。卒業する時、社会に出た後で、大学生活を有意義だったと思返せるような時間を過ごせることを願っています。

オープン
キャン
パスでの活
動



入学生のみなさんへ

入学おめでとうございます。

新型コロナウイルスの関係で、入学式が中止となり、またガイダンスや授業開始も遅れることになり、残念に思っていることでしょうか。通常でも新しい生活には期待や希望とともに不安や心配がつきものですから、なおさらです。今回の事態はグローバル化の負の側面とともに、地球温暖化による気候変動、少子高齢化と人口減少社会の到来、ICT、AI、IoT時代の到来などとともに、不透明な時代を象徴するものと言えます。教職員もこの未曾有の事態に対処すべく努力を続けていますので、みなさんの協力を切にお願いいたします。

このような時代であるからこそ、みなさんには大学で学ぶことの意義を深く考えてほしいと思います。大学は学問の場です。学んで問うこと、問うて学ぶこと、この繰り返しが学問です。教育も含め、社会には様々な情報があふれていますが、何が真実であるのか、有益な情報であるのかは判別がつかず、逆に嘘や詐欺、誹謗・中傷があふれています。真実を見抜き、進むべき方向を見いだすためには、過去から積み上げられてきた知の体系を身に付けることが必要です。

もちろんその真実も方向も一つとは限りません。すべては疑いうるもので、本物は見つからないかもしれません。ルソーが書いた『エミール』の中に、「理性、判断力はゆっくり歩いてくるが、偏見は群れをなして走ってくる」という言葉があります。社会では往々にして理性が、偏見や無知に押し流されることもあります。それでもあきらめずに、多くの先人によってつながれてきた連綿とした知の営為を、みなさんが引き継ぎ、未来に伝えていくことを期待しています。

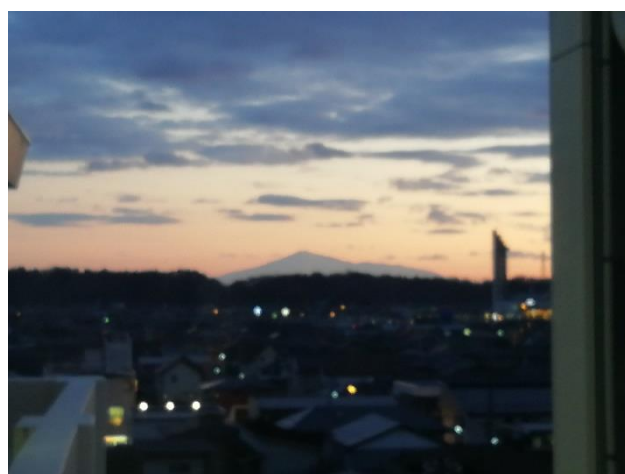
大学の学びは教師や公務員、企業人などの職業にも結びついていますが、その職業技能は、批判精神、科学的精神、市民精神（シティズンシップ）と融合することによって自分と社会と未来を拓く揺るぎのないものとなるのです。

学問の営みは決して派手なものではなく、地道で、目立たないものです。あきらめずに一步一步

教育文化学部長・教育学研究科長 佐藤 修司
進むことである日、トンネルを抜け出たように、また、山頂に立ったときのように視界が一挙に開けるのです。未来へのバトンはみなさんの手の中にあります。



秋田駅から眺める太平山（3月24日）



大学から眺める鳥海山の夕景（12月16日）
4号館と5号館をつなぐ5階の廊下から撮影
右手の塔は秋田駅西口に隣接するNHK秋田放送局

発行 秋田大学教育文化学部／教育学研究科

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1 TEL 018-889-2509 FAX 018-833-3049

教育文化学部・教育学研究科HP <http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>

学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html

教職大学院通信「暁鐘の音（かねのね）」⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html

* 誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌（1910年制作）を聴くことができます。

http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html をご覧ください。